

中村学園大学教育学部の保育者養成学位プログラムの学修目標を

学修したと学生が認識する授業科目

笠原正洋・坂本真由美・山田朋子・吉松遊佳（中村学園大学教育学部）

問題と目的

本報告は、教学マネジメント体制整備の一環として、中村学園大学教育学部(以降、本学と表記)の保育者養成に係る学位プログラムレベルと授業科目レベルとがどの程度関連しているのかその実態を明らかにするために、学修者である学生を対象にして行われた調査報告である。本学の保育者を志望する4年次学生は、後学期に開講される教職実践演習の授業の場で学位プログラムの観点別の学修目標の評価内容と基準(段階あるいはステージ)を示したDP(ディプロマポリシー)ルーブリックを用いて、その達成度を点検・評価する。その際に、学修者の視点から4年間の教育課程のどの授業科目でそれらの評価内容を学修したと認識しているのかを調査した。

そもそもルーブリックには3種類のルーブリックがあり、段階的な連関を持っていなければならない。課題ルーブリックは、授業科目の到達目標のある領域(単元)に関わる課題についての評価内容と基準を示しており、当然、その授業科目の到達目標の一部を成している。次に、ある授業科目の到達目標の評価内容と基準を示したのが授業ルーブリックである。その中には、先述の課題ルーブリックや学期末テスト等のルーブリック等が含まれることになる。さらに、その授業ルーブリックは、学部のディプロマポリシーに基づく学位プログラムの学修目標の評価内容と基準を示すルーブリック(本学ではこれをDPルーブリックと表記)にも関連づいていなければならない。

しかし、実際のところ授業科目の到達目標は、学部の教育課程のDPルーブリックの観点別の学修目標と関連づけられているのだろうか。「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」や「教学マネジメント指針」では、学修者が「何を学び、身に付けることができるのか」を大学全体レベル・学位プログラムレベル・授業レベルのそれぞれのレベルにおいて明確にし、学修者自身が実感できること、さらには高等教育機関がこのような教育が行われているのかを自律的に確認できる質保証の体制を完備することを求めている。このような教育の質保証を目指すためにも、学位プログラムと授業の関連をモニターしながら、

個々の教員が教えたい内容ではなく、DPルーブリックに関連づけた教育を行う必要がある。

このような考えから、これまでどの程度学生と教員の双方がDPルーブリックに基づく教育を受けている、あるいは行っていると認識しているのかその実態把握調査を行ってきた(吉松他11名, 2020)。しかし、学修者を対象とした調査手続きに問題があり、実態を十分に把握できなかった可能性があった。具体的には、2019年度に卒業した保育系学生87名に、初年次教育関連科目や実習事前事後指導科目、そして卒業研究関連の科目は、演習や実習に該当するため除外科目として、回答しないよう教示した。しかし、実際には、科目名を自由記述させる手続きを取ったために、学生が一つの科目を複数の学修目標にわたって回答する事態が生じた。

そこで今年度の調査では、回答する科目を一覧表で示し、そこから選択して回答する手続きに変更した。この手続きにより、保育者養成に関わる学修目標を、学生がどの授業科目で学修したと認識しているのかその実態を明らかにする。

方法

1. 調査対象者：2020年度本学4年次後学期開講科目である「保育・教職実践演習(幼稚園)」を履修した116名である。
2. 調査内容と手続き：調査は、LMS(UNIPA)を通して実施された。配布した資料は、①「保育職ルーブリック尺度2020(DPルーブリック)」、②「調査科目一覧」及び③「学修目標の達成影響科目調査」である。この③の資料を回収し分析した。

回答の手順についてもLMSにより説明した。資料①「保育職ルーブリック尺度2020(DPルーブリック)」の評価内容と基準を見ながら、その内容をどの授業科目で学修したかを資料②の一覧から選択し、その科目名を資料③に記入するよう依頼した。なお、教職実践演習の初回授業の全体会1においても口頭で説明した。

「保育職ルーブリック尺度2020」は、外部評価を受けて、評価内容や基準を見直され加筆修正を施さ

れている(坂本他 11 名, 2020; 坂本他 3 名, 印刷中)。この尺度は, 5 つの観点別の学修目標があり, それは「第 1 カテゴリ」と表記されている。そして観点別の学修目標は, その観点を細分化した評価内容から構成されている。これは「第 2 カテゴリ」と表記されている。

これらの評価内容は 5 段階の基準から評価される。S は, 「卓越: 専門職として保育実践の場に出て実践できるレベルに達している」, A は「優秀: 専門職として保育実践の場に出るレベルに達している」, B は, 「標準: 保育士資格・幼稚園免許取得者として標準的な技能や態度を実践できるレベルに達している」, C2 は, 「基礎: 実習で通用するレベルに達している」, そして C1 は, 「初歩: 保育を学んだ大学生としての基本修得レベルに達している」である。S レベルは, 保育職としての指導的立場を, A レベルは中堅保育者を想定している。

このように養成校卒業以降の基準を提示したのは, 養成校段階で保育職として学びが終わるのではなく学び続ける姿勢を醸成するためである。具体的には, 中央教育審議会答申(2015)に基づく教員育成指標の構築とそれに基づく研修が実施されている現状を受け, 学生が赴任するそれぞれの自治体における育成指標を意識したうえで保育職としてのキャリアを自律的に発達させる志向性を形成することを意図している。なお養成校としての教職・保育士養成課程の総まとめである本学の「保育・教職実践演習(幼稚園)」の授業では B レベルまでの達成度をめざすことが到達目標となっている。

3. 調査実施時期: 配布資料が LMS に提示された期間は 2020 年 9 月 16 日から 10 月 1 日までである。

結果及び考察

DP ルーブリックの観点別学修目標の細分化された学修目標(第 2 カテゴリ)毎に学生の回答人数(割合)の多い上位 3 科目まで報告する。上位 2 科目までに累計の割合が 70%以上の場合及び回答人数が 5 人以下の場合はセルに「—」と表記した。

1. 保育職に関する総合的理解

この学修目標の評価内容(第 2 カテゴリ)は次のとおりである。①保育の歴史、制度、運営に関する理解, ②保育所保育指針・幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の理解, ③全体的な計画・教育課程の理解と作成及びカリキュラムマネジメント

の理解, ④健康及び安全に関する理解と実践, ⑤子育て支援の理解と実践, ⑥人権の理解と実践である。結果を表 1 に提示した。

「保育所に関する総合的理解」に関して, ①から⑤までは, 6 割を超える学生が共通した科目を回答している。②の 3 位に「乳児保育 A」が回答されたのは保育所保育指針の改定内容であることによると考えられる。また, ③の 3 位に「保育内容言葉 II」が回答されたのは, 領域「言葉」の実践的な授業においてカリキュラムマネジメントの観点が教授されたことによると考えられる。なお, ⑥の人権の理解と実践に関しては, 一覧表にない, 共通(教養)科目の「人権教育」を上げた学生が多いことによる。これは調査方法に改善の余地があることを示していると思われる。

昨年度の調査結果(吉松他 11 名, 2020)と比較すると, ①と⑤(昨年度は④と表記)はほぼ同じ科目であり, ②では, 昨年度の「保育内容総論」と「教育原理」が今年度は「保育原理 A」と「乳児保育 A」に入れ替わった。③は, 昨年度の「幼児教育課程総論 II」と「保育内容総論」が今年度では「教職研究」と「保育内容言葉 II」に入れ替わった。今年度の第 2 カテゴリの④及び⑥については, ルーブリックの見直しにより新たに内容を変更したため比較はできなかった。

表 1. 学修目標「保育職に関する総合的理解」を学んだと考える科目と人数(割合)

内容	1位	2位	3位	総計		
① 保育原理A	31(27.0)	教育原理	28(24.3)	教育制度論	26(22.6)	85(73.9)
② 幼児教育課程総論 I	36(31.3)	保育原理A	24(20.9)	乳児保育A	14(12.2)	74(64.4)
③ 幼児教育課程総論 I	51(44.7)	教職研究	14(12.3)	保育内容言葉 II	13(11.4)	78(68.4)
④ 保育内容健康 I	45(38.8)	子どもの保健 I A	26(22.4)	子どもの保健 II	14(12.1)	85(73.3)
⑤ 保育相談支援	83(71.6)	相談援助	7(6.0)	教育相談, 障害児保育, 子育て支援論	4(3.4)	98(84.5)
⑥ 教育原理, 幼児理解	13(6.7)	児童家庭福祉, 社会福祉	7(9.0)	—	—	40(51.3)

2. 子供理解

この学修目標の評価内容は, ⑦子供の発達の理解, ⑧特別なニーズや特別支援の必要な子供の理解と援助・指導, ⑨乳児保育に関する理解と援助・指導である。結果を表 2 に提示した。この観点別の学修目標は表 2 に提示された当該の授業によって達成されていると大多数の学生が認識していることが示された。

昨年度の結果と比較すると, ⑦については昨年度あがった「保育内容総論」が今年度は「幼児理解」に入れ替わった。⑧については, 昨年度の「施設実習研究 A」が社会的養護に関する科目と「保育相談支援」に入れ替わった。⑨については, ルーブリックの見直しにより新たに内容を変更したため比較はできなかった。

表2. 学修目標「子供理解」を学んだと考える科目と人数(割合)

内容	1位	2位	3位	総計		
⑦ 発達心理学A	55(47.4)	乳児保育A	42(36.2)	幼児理解	4(3.4)	101(87.1)
⑧ 障がい児保育	53(45.7)	特別支援教育総論	44(37.9)	社会的養護A、社会的養護内容、保育相談支援	4(3.4)	109(94.0)
⑨ 乳児保育A	112(97.3)	—	—	—	—	112(97.3)

3. 子供の援助・指導の知識と技能

この学修目標の評価内容は次のとおりである。⑩ 養護の理解と援助・指導、⑪5 領域「健康」の理解と援助・指導、⑫5 領域「人間関係」理解と援助・指導、⑬5 領域「環境」の理解と援助・指導、⑭5 領域「言葉」の理解と援助・指導、⑮5 領域「表現」の理解と援助・指導、⑯記録・デイリープログラム・指導計画及び評価の理解と作成である。学生の回答結果を表3に提示した。

⑩から⑭までの領域に関する回答は、大多数の学生に共通していた。⑮領域「表現」の回答結果については、本学独自の教育課程によると考えられる。本学は、保育所保育指針の領域「表現」を「表現音楽」と「表現造形」とに分離して教育課程を編成している。領域「表現」の回答に「表現音楽」と回答する学生がやや多い結果となった。このとは同じ領域「表現」でありながら、音楽に関することと学生が認識していることを示しており教育課程編成上の在り方を議論する必要があるとも考えられる。

なお昨年度の結果と比較すると、⑩から⑮までの結果は、昨年度の結果とほぼ同じ科目が回答されていた。⑯について昨年度は「保育課程総論」、「幼児教育課程総論Ⅰ」そして「保育所実習研究A」が上位を占めていたが、「保育内容言葉Ⅰ」、「児童文化表現」、「保育内容人間関係Ⅰ」に入れ替わっていた。指導法に関する授業の中でより実践的に記録や指導計画の指導がなされるようになったとも考えられる。

表3. 学修目標「子供の援助・指導の知識と技能」を学んだと考える科目と人数(割合)

内容	1位	2位	3位	総計		
⑩ 社会的養護A	31(27.0)	乳児保育A	28(24.3)	社会的養護内容	24(20.9)	84(73.0)
⑪ 保育内容健康Ⅰ	93(80.2)	保育内容健康Ⅱ	16(13.8)	—	—	109(94.0)
⑫ 保育内容人間関係Ⅰ	92(79.3)	保育内容人間関係Ⅱ	23(19.8)	—	—	115(99.1)
⑬ 保育内容環境Ⅰ	94(81.7)	保育内容環境Ⅱ	19(16.5)	—	—	113(98.3)
⑭ 保育内容言葉Ⅰ	88(75.9)	保育内容言葉Ⅱ	25(21.6)	—	—	113(97.4)
⑮ 保育内容表現音楽Ⅰ	44(40.4)	保育内容表現造形Ⅰ	33(30.3)	保育内容表現音楽Ⅱ	13(11.9)	90(82.6)
⑯ 保育内容言葉Ⅰ	20(18.1)	児童文化表現	16(14.4)	保育内容人間関係Ⅰ	15(13.5)	51(46.0)

4. 課題探求力

この学修目標の評価内容は次のとおりである。⑰自己を理解し、自己課題を認識し改善する努力、⑱疑

問に対して絶えず問い続け批判する思考力、⑲自己の保育観育成のための研究心及び研修意欲である。

結果を表4に提示した。総じて、「課題探求力」という学修目標の観点を達成した科目の回答人数が非常に少なく、回答がばらばらしている。おそらく課題探求力の「自己課題」や「思考力」、「保育観育成」というキーワードの捉え方が学生によって多様であることが反映された結果であると考えられる。保育職専門家として学び続ける意欲や志向性を備えた保育者養成を意図した学修目標なのか、論理的思考能力、文理融合や数的リテラシーを重視する大学生としてのリサーチワーク能力を目指した学修目標なのかを明確に定めたいえで再調査をする必要があると考えられる。

なお昨年度の結果は、⑰から⑲はすべて実習の事前事後指導に関する科目と「保育内容総論」だった。つまり、それらは保育所の総合的な指導と振り返りの科目であり、保育職専門家の養成を意図した学修目標であると学生に理解されていたと考えられる。

表4. 学修目標「課題探求力」を学んだと考える科目と人数(割合)

内容	1位	2位	3位	総計		
⑰ ビデオ基礎	12(12.1)	教職研究	10(10.1)	幼児教育課程総論Ⅰ	9(9.1)	31(27.0)
⑱ 保育相談支援	14(14.7)	教育相談、児童文化表現	9(9.5)	教職研究、幼児教育課程総論Ⅱ	7(7.4)	46(48.4)
⑲ 児童文化表現	16(16.2)	幼児教育課程総論Ⅱ	11(11.1)	幼児理解	10(10.1)	37(32.1)

5. ジェネリックスキルと対人関係能力

この学修目標の評価内容は次のとおりである。⑳ ICT活用能力(ワード・エクセル等での文書作成、文書管理能力)、㉑情報モラルの理解、㉒積極的にチャレンジし、自己表現する力、㉓協調性、チームとしての連携・協働する力、㉔社会人としてのマナー・常識(挨拶、服装、言葉遣い)、㉕管理(報連相及び確認、自己管理等)である。

結果を表5に提示した。この学修目標は「ジェネリックスキル」と表記されているように大学生としての資質能力を査定するものである。いわば文理融合や数的リテラシーを重視する大学生としてのリサーチワーク能力を目指した学修目標である。しかし、今回の調査結果は、学修目標の中のキーワードの内容を、保育専門性を高めた科目の中に見いだそうとした結果を反映していると考えられる。そのため今回、学生に提示した保育者養成に関わる専門科目ではなく、リサーチワーク能力に関する科目一覧を準備するなど研究の調査デザインを再考すべきだったと考えられる。

なお昨年度の結果は、⑩は教養科目の「情報処理A/B」を上げるものが多く、⑪の情報モラルの理解に関しても実習の事前事後指導と「情報処理A」を上げる学生が多かった。⑫は「保育内容表現音楽Ⅱ」と「造形A」、「音楽Ⅱピアノ」を回答する学生が多く、ジェネリックスキルに関する授業科目を回答していないことは本年度も同様だった。さらに、⑭と⑮については実習の事前事後指導と教職研究を上げる学生が多かった。

表5. 学修目標「ジェネリックスキルと対人関係能力」を学んだと考える科目と人数(割合)

内容	1位		2位		3位		総計
	科目	人数(割合)	科目	人数(割合)	科目	人数(割合)	
⑩ 教育情報処理A	教育情報処理A	45(66.2)	保育相談支援	6(8.8)	—	—	53(77.9)
⑪ 教育情報処理A	教育情報処理A	22(34.4)	教職研究	14(21.9)	保育相談支援	9(14.1)	45(70.3)
⑫ 保育内容表現音楽Ⅰ	保育内容表現音楽Ⅰ	27(24.5)	保育内容表現音楽Ⅱ	14(12.7)	音楽Ⅱ歌唱	9(8.2)	50(45.5)
⑬ 幼児教育課程総論Ⅰ	幼児教育課程総論Ⅰ	32(28.6)	音楽Ⅱ歌唱	29(25.9)	教職研究	15(13.4)	76(67.9)
⑭ 乳児保育A	乳児保育A	23(24.7)	教職研究	19(20.4)	児童文化表現	14(15.1)	56(60.2)
⑮ 教職研究	教職研究	31(31.3)	児童文化表現	14(14.1)	乳児保育A	13(13.1)	58(58.6)

6. 回答者数10名未満の科目

今回の調査から、①から⑮までの観点別の学修目標を達成したと考えられる科目とその人数を調査した。その一方で科目ごとに何人の学生が何らかの学修目標を高めたと考えたのかを見ることもできる。たとえば、回答者が0人という科目も存在する。ちなみに回答者数が10名未満の科目は96科目中52科目存在した。もちろんこれらの科目の中には、小学校教諭養成に関わる科目もある。しかし、保育者養成に資する科目も多い。なぜそのような結果になったのかをさらに追及していくことも必要である。

7. まとめと今後の課題

「保育職に関する総合的理解」と「子供理解」、「子供の援助・指導の知識と技能」という3つの観点の学修目標については、若干の科目の違いはあるが多くの学生の回答が共通していたと言える。しかし、「課題探求力」と「ジェネリックスキルと対人関係能力」については、調査実施者側の教育研究視点が揺れていたため、学生の回答にかなりばらつきが認められた。

この背景に何があるのかは今後の課題である。まずDPループリックに本学の理念や独自性が十全に反映されており観点別の学修目標に不足がないかを実務者らの外部評価の結果も踏まえながら再検討する必要がある。また学生たちは、担当した教員個人の教育技術(能力)に影響されて授業科目の到達目標が学位プログラムの学修目標と関連していなかった可能

性がないのかなど検証していくことが求められる。

教員が学修目標を踏まえずに教員が教えた内容を教えた結果は避けなければならない。人も時間も有限という中で大学の教育の質保証を目指しての検証のサイクルを回していくことがこれからも重要となる。その際には、授業評価アンケート結果、シラバスの記載内容、初年次教育の在り方、学修ポートフォリオなどの指標も検討対象となるだろう。

最後に、今回の調査でも学生は第2カテゴリでのキーワードと似た授業科目名を機械的に選択した可能性も否定できない。回答に際して、学生と教員とが個別面談をしながら、ある学修目標をどの授業で履修し、学修目標の達成の程度にどのように影響したのか、どのような指標によってそれらが最適に測定されるのかなどの質的調査を行い、その結果に基づいて調査手続きの改善を図る必要があるだろう。大学・学部・授業担当者というレベルで十分な議論を踏まえて教学マネジメントを完遂していくことが求められる。

引用文献

- 中央教育審議会. (2015). これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教育育成コミュニティの構築に向けて～(答申).
- 中央教育審議会. (2018). 2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申).
- 中央教育審議会大学分科会. (2020). 教学マネジメント指針.
- 坂本真由美他3名. (印刷中). 保育職ループリック尺度の変遷. 中村学園大学発達支援センター研究紀要, 12.
- 坂本真由美他11名. (2020). 「自ら学び続ける力」を備えた保育者養成課程の開発的研究(2)―外部評価による保育職ループリック基準の見直し―. 中村学園教職教育研究, 3, 32-37.
- 吉松遊佳他11名. (2020). 「自ら学び続ける力」を備えた保育者養成課程の開発的研究(3)―保育職ループリックを活用した科目の学修目標と学生の学びの実態―. 中村学園教職教育研究, 3, 38-41.